

存在の思索と分極の力学

— ハイデガーとニーチェにおける修辞学・解釈学・文献学 —

村井則夫

古代ギリシア以来の伝統をもつ修辞学・解釈学・文献学は、いずれも言語・意味・文書に関わる技術論として、人文的・神学的学知の中枢を占めてきた。特に 19 世紀半ば以降、言語の媒介機能が知における構成的な契機と認められることによって、言語に関わるこれらの学の三重性が、哲学の中で再評価を受ける。特に 1960 年代以降、ブルーメンベルクのメタファー論、ガダマーの哲学的解釈学、デリダのグラマトロジーなど、それぞれ修辞学・解釈学・文献学に相応する哲学的言説が続々と生み出されている。言語現象と高度の哲学的反省を結びつけるこの現代哲学の動向は、ニーチェの文献学、そしてハイデガーの解釈学を源泉のひとつとしている。本発表では、こうした問題意識を背景にしながらハイデガーのニーチェ解釈を検討することで、ニーチェとハイデガーの接点と相違点、そして何よりも、ニーチェを批判することでハイデガーが目指した方向性を見究めることにしたい。

若きニーチェが古代ギリシア研究を通じて構想した文献学とは、ヴォルフを模範として、著者や作品の統一性を複数の伝承過程へと解体する批判的手法を意味していた。この文献学においては、伝承過程における偶然や非連続性が主要な契機となることで、意味の連続性が後退し、替わって美的統一としての「仮象」の理解が導入される。この仮象理解は、修辞学を言語論・転喻（比喩）論とみなす「修辞学講義」を通じて一般化され、基体的意味を消去された転喻という徹底した仮象理解へと向かう。こうしてニーチェは、実体なき仮象といった脱形而上学的な構想を強化し、やがてはそれが「力への意志」の思想へと展開される。そこにおいては、遠近法的解釈の仮象性と、それ自体は意味化しえない「力」との緊張関係が主題化され、地平的・仮象的「意味」の形成と脱地平的な「力」との葛藤が、意味の多元論と複数の力の闘争論へと分極していく。ニーチェの解釈理論は、こうした意味と力との分極の力学であり、その解明が系譜学と名づけられたものにほかならない。

これに対してハイデガーは、早い時期から神学的意味での解釈学に親しみ、聖書解釈学の伝統に見られる意味理解と人間存在との対応に注目することで、現存在の実存論的分析の着想を獲得している。加えてその洞察は、アリストテレスの修辞学に対する関心によって補強され、言語的・間主観的に媒介された世界性の理論、つまり「日常性の解釈学」とともに、『存在と時間』の現象学的解釈学へと合流する。こうして『存在と時間』でのハイデガーは、修辞学を意味の遂行論としての解釈学へと収斂させることで、意味地平の成立と了解遂行との循環的な関係を、現存在の自己関心と時間性における自己再帰的な関係の内に基礎づけていった。

1930 年代半ばに始まる一連のニーチェ講義は、ハイデガー自身が、『存在と時間』の解釈学か

ら徐々に離脱を始める時期と平行して進められる。30年代のハイデガーは、特に遠近法主義や意味地平の形成といった側面から、ニーチェの思想を自らの解釈学を重ね合わせるかたちで積極的に理解する一方で、40年代には、ニーチェを「形而上学の完成者」とみなして批判的に捉え、やがては存在理解の「別なる始源」を目指して、前ソクラテス期の思想家たちに対する特異な「文献学」へと歩みを進めていく。つまりハイデガーは、ニーチェに託して解釈学的理論を普遍化することによって、その存在論上の難点を浮彫りにし、もはや維持しえなくなった解釈学を「形而上学の完成者ニーチェ」の名の下に精算していったものと考えられる。このような進展は、「存在の意味」の解釈学から「存在の真理」の思索へ向かう後期ハイデガー自身の歩みと正確に対応している。意味地平と真理生起の差異を中核とする存在の思索は、言語的意味を存在論的差異の分極の生起から捉え直し、その運動をテキスト解釈のうえでも実践するように、脱意味化の解釈学、あるいは非解釈学的な文献学への道を進むのである。そしてそれは同時に、若きニーチェが目指した文献学への還帰、あるいは分極の力学としての系譜学への接近とも言えるものであった。

このような背景全体を視野に収めるなら、修辞学と文献学の緊張を保持したまま系譜学を形成しようとしたニーチェに対して、ハイデガーのニーチェ解釈では、修辞学と文献学とが区別されることなく、解釈学的な意味了解の一元化と普遍化が図られていること、そしてそれがまたハイデガー自身における解釈学的現象学の自己克服と平行していることが理解できる。このような推移においては、ニーチェの仮象概念を主題とした1937年のゼミナール（「存在と仮象」87巻）が、ひとつの思想的分岐点の意味をもっていると思われる。本発表では、この仮象理解を踏まえながら、後期ハイデガーにおける意味と真理との分極に注目し、存在の思索とニーチェの文献学が交叉する地点を探りたい。（2000字）